

クラリネットを吹く男

小川未明

青空文庫

李^りさんが、この町^{まち}にすんでから、もう七、八年^{ねん}になります。い
 まではすっかり町^{まち}の人^{ひと}としたしくなつて、えんりよ、へだてがな
 くなりました。工場^{こうじやう}へつとめ、朝^{あさ}出^でかけて晩^{ばん}に帰^{かえ}つてきます。
 やす
 休^{やす}みのときは、よく近^{きん}所^{じよ}の源^{げん}さんのところへあそびにいきま
 した。この二人^{ふたり}は、わけて仲^{なか}がよかつたのです。源^{げん}さんは会^{かい}社^{しゃ}
 につとめて、ごくほがらかな性^{せい}質^{しつ}でありましたが、李^りさんはそ
 れにくらべて口^{くち}数^{かず}の少^{すく}ない、うちきなところがありました。
 ふたり
 二人^{ふたり}は、顔^{かお}を見^みると、将^{しょう}棋^ぎをさしました。源^{げん}さんのほうが、
 いくらか李^りさんよりは強^{つよ}いようでした。しかし、李^りさんは、音^{おん}
 楽^くにも趣^{しゆ}味^みをもつていて、ラジオで、歌^{うた}を放^{ほう}送^{そう}するときなど、

将棋しょうぎをさしながら、自分の駒じぶんこまがとられるのも知らず、歌うたのほうに気きをとられていました。あるとき、朝鮮ちようせんの歌うたが、若い女わかおんなのひとひとに歌うたわれました。

李りさんは、目めに涙なみだをためて聞きいていました。

「李りさん、あれはどんな歌うたかね。」と、源げんさんがきくと、李りさんは、さびしく笑わらって、

「鳥とり、鳥とり、どこへいく、あちらの山やまへというような歌うたですよ。」と、答こたえました。

「ははあ、どこの国くにも、子守唄こもりうたは、かわらないんだね。」

「そうですとも、私わたし、子供こどもの時分じぶんに、おばあさんが、よく歌うたってくれました。」

「李さんは、クラリネットが、うまいそうだが、ひとつきかせておくれよ。」と、源さんがいいました。

「私の生まれた町へも、あめ屋がよくクラリネットを吹いてきました。私、あの音が大すきで、はたらくようになってから、古道具屋に下がっていたのを買って、吹くことをおぼえました。こんど、野原へいつてきかせます。」

李さんが、休みの日には、源さんが出かけなければならなかった。二人が、クラリネットを持って、そとへいくような日は、ついにこなかつたのでした。

ある日、李さんは一人で土手の上でクラリネットを吹いていました。もう、夏もいくころで、空には、赤い花びらをちらしたよ

うに、雲が美しく飛んでいました。

ちようど良ちゃんと清ちゃんが、川を後にして、釣りから帰つてくる途中でした。二人は話しながら、いい音のする方へ、土手を上つて近づいてきました。

「あつ、だれだと思つたら李さんか、うまいんだなあ。」と、良ちゃんは、感心しました。

「もう一つ、なにか吹いてきかせておくれよ。」と、清ちゃんがたのみました。すると李さんは、しずかにくれていく、遠い空の方をながめながら、「ぼうやはいいい子だ、ねんねしな」の子守唄を吹いてきかせました。二人の少年は、じつと耳をすましてきいていました。バケツを下に置いて、さおを肩にかついだ

まま、お母さんかあに抱だかれていたころを思い出だすように……。

それから、三人にんは、話はなしながら、お家うちの方ほうへ帰かえつていきました。

「僕ぼくは、学がっこう校がで会かいがあると、ハーモニカを吹ふくんだよ。」と、良りようちゃんが、いいました。

「李りさん、良りようちゃんはうまいんだよ。」

「こんど、クラリネットと合あわせてみようか。」

「ほんとうに、吹ふいてみよう。」

秋あきのはじめでした。源げんさんに、召しょう集しゅう令れいが下くだりました。

「どうか、家いえのことはあんじないで、お国くにのためにはたらいてく
ださい。」と、近きん所じよの人ひと々びとが、源げんさんにいいました。

「一命めいをささげて、ご奉ほう公こういたします。」と、源げんさんは、誓ちかい

ました。

それから後のことです。源さんの家では、お菓子屋をはじめま
した。李さんは良ちゃんに、

「どうだ、一つジンタになって、店のひろめをしてやろうじやな
いか。」と、いいました。

「ああ、それがいい。」と、良ちゃんは賛成して、清ちゃんに
も相談しました。

冬空の下に、クラリネットと、太鼓と、ハーモニカの音が、
いりまじって聞こえました。中でも調子の高いクラリネットの
音は、光った雲にまでとどくようでした。

町の人々は、戸口へ出てみると、先に立って歩いているのは

李さんです。背中に大きな紙を下げていました。それには、

「銃後をまもるために、菓子屋を開きました。みなさん、ごひ

いきにしてください。」と、書かれ、その下に番地と店の名がし

るしてありました。李さんのつぎに、半ズボンをはいた良ちゃん

が、ハーモニカを鳴らし、その後、大太鼓をたたき清ちゃん

がつづきました。大太鼓は、町会から借りたものです。

折から西日のさした町の内は、この楽隊の音で、いつそう明

るく見えました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

初出：「せうがく三年生」

1940（昭和15）年2月

※表題は底本では、「クラリネットを吹《ふ》く男《おとこ》」
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

クラリネットを吹く男

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>